

鳩摩羅什の訳経

——般若龍樹系経論(一)——

八 力 広 喜

はじめに

鳩摩羅什(以下、羅什とする)が中国仏教史上に残した偉大な足跡については、従来より諸学者によって十分に検討せられてきたところであって、今ここにあらためて論ずる必要はないであろう。ただ、彼の活動の主要な分野である「訳経」については、検討せらるべき点が少くないように思われる。訳経については一般的にいつて

- (1) どのような経典を翻訳したか。
- (2) 翻訳時はいつであるか。
- (3) 訳経の動機、姿勢、態度はどうであったか。
- (4) 訳経の特徴はどうであるか。

などの点が明らかにされることが必要なのであろうが、羅什の場合も他の翻訳者におけると同様に、諸経録、経論序、

後記、僧伝などを手がかりとして、これらの諸点が検討されてきたことは言うまでもない。

しかしながら、当時の中国仏教界において、国家的な保護のもとに翻訳事業に着手していた羅什にたいして、僧伝などは必ずしも厳正な描写をしているとは限らない、と言われる。このことに関しては、すでに塚本善隆博士によって指摘せられてきたところである(1)。さらに先の諸点についても、(1)については諸経録によって経数に差がありすぎるし、(2)についてはかなり重要な經典でも不明なものがある(2)。(3)についても経論序、後記の作者によって、あるいは紛飾されている面もあるかもしれない。ただ(4)に関しては、ようやく最近になって原典との比較対照によって、少しずつ解明されてきてはいるが(3)、これには原典の参照不可能な経論(4)が多いから、羅什の訳風を総合的に論ずるにはかなりの注意と時間が必要であろう。

このようにみえてくると、羅什の訳経についてまだ検討の余地が残されていると言えるのであるが、もとより、先の諸点を解明することは容易ではない。その理由もいろいろあるであろうが、基本的には、訳経である以上、原典を中心とした考察が十分なしうる状況になければならないが、実はこれが大きな問題であって、羅什が当時参照した「原典」であるかどうかを別問題としても、ともかく梵本が残っているものは、断片を含めても一割程度にしかすぎない(5)。従って、これらの諸原典との比較対照のみから羅什の訳経の総体を論ずることはできないし、それを補う中国の資料の検討もまた十分になされなければならない。さらに中国的な誇張の中から事実を究明してゆくこともまた容易ではないのである。

従来より漢訳經典には、中国的変容があらわれていることが指摘されてきたが(6)、特に羅什の場合には、中国的

変容というよりむしろ「鳩摩羅什化」であるといわれ⁽⁷⁾、中村元博士は翻訳というより創作である⁽⁸⁾、とさえ言っておられる。これは羅什の思想がそれだけ強く訳経のうえにあらわれていることを意味するものであるが、羅什の訳経は、大乘經典、小乘經典から論書、律にいたるまで広範囲であるから、全訳経にあらわれる特徴を論ずることはきわめて困難である。しかし伝記によれば羅什が長安においてさかんに訳業に従事しながらも、般若竜樹系の仏教に力をそそいだことが知られ⁽⁹⁾、また後に、吉蔵が三論宗を聞く根拠になった、中論、百論、十二門論などの翻訳も羅什によって行われていた。羅什の訳経の一覧をみても⁽¹⁰⁾、この般若竜樹系の経論が、かなりの部分を占めているし、また、一群としてとらえるに十分な量をしめているのである。従って、後の中国仏教界に与えた影響などから考えても、この般若竜樹系経論の検討はきわめて重要であることが明らかである。

本稿では、ひとまず原典との比較対照という内容検討にたち入らず、経録、経論序、後記など、中国の資料によって、翻訳の状況、動機、態度などを通じて羅什の般若竜樹系論の取り扱い方の検討をしたいと思う。

なお、ここで般若竜樹系経論というのは、般若経類と竜樹系論書を意味する。

般若竜樹系経論の訳出

羅什の伝歴は「出三藏記集」「高僧伝」によってみると、およそ前後の二時期に分けることができる。前期は西域時代、後期は中国時代である。

塚本善隆博士は、羅什の西域時代の伝歴をさらに二期に分けておられる⁽¹¹⁾。博士によれば

(一) 二十才まで（推定三五〇～三六九）

龜茲国王妹の母のもとで仏教教育をうけ、主として小乗教、特に説一切有部の教学によって修学、具足戒をうけて比丘となるまで。

(二) 三十五才まで（推定三七〇～三八四）

叔父龜茲国王を檀越とする王新寺で次第に大乘仏教に親しみ、主として竜樹系の大乗教学に傾倒し、小乗全盛の龜茲国に大乘の名僧として傑出する時代である、とされている。

「高僧伝」は

「至三年十二。其母携還龜茲。諸国皆聘以重爵。什並不顧。時什母將什至三月氏北山。有二羅漢見而異之。謂其母曰。常当守護。此沙弥若至三十五不破戒者。当大興仏法。度無数人。与優波掘多無異。若戒不_レ全無_レ能為_レ也。正可_レ戈明携詣法師而已。」⁽¹²⁾

と述べて、羅什三十五才に起る事件を一羅漢が暗示したことにしている。これは同じ伝の

「(呂)光遂破龜茲。殺純。立純弟震為主。光既獲什。未測其智量。見年齒尚少。乃凡人戲之。強妻以龜茲王女。什距而不受。辞甚苦到。光曰。道士之操不踰先父。何可固辞。乃飲以醇酒。同閉密室。什被逼既至。遂虧其節。」⁽¹³⁾

という事件の弁護をしたものであろうが、ともかく、龜茲を征服(三八四)した前秦苻堅の將軍呂光に捕えられ破戒のやむなきにいたった。その後羅什は姑蔵(甘肅、武威)に伴われてきたが、呂光は叛乱のために長安に帰ることがで

きず、ここに独立して後涼を立てた(三八六)。つまり三十五才で区切るのは、このような事件を背景としている。

「停_レ涼積年。呂光父子既不_レ弘_レ道。故輶_ニ其經法_ニ無_レ所_ニ宣化_一。符堅已亡竟不_ニ相見_一。姚萇聞_ニ其高名_ニ虛_レ心要請。到_ニ晉隆安二年_一(三九八)。呂隆始聽_ニ羅什東既至_ニ姑藏_一。會萇崩子興立。遣_レ使迎_レ什。弘始三年(四〇一)有_レ樹連理。生_ニ于廟庭逍遙園_一。萇變為薤。到_ニ其年十二月二十日_一。什至_ニ長安_一。待以_ニ國師之礼_ニ甚見_ニ優寵_一。(14)」

しかし捕虜生活中は、呂光の仏教に対する無関心のため教化活動ができなかった。涼に滞在した十数年はいわば羅什の苦難の時代ということができらるであろう。

さて、そこで羅什が般若竜樹系經論に接した時期についてであるが、「高僧伝」は

「時_ニ有_ニ沙車王子參軍王子兄弟二人_一。委_レ國請_ニ徒而為_ニ沙門_一。兄字須利耶跋陀。弟字須利耶蘇摩。蘇摩戈伎絶_レ倫專以_ニ大乘_ニ為_レ化。其兄及諸學者皆共師_レ焉。什亦宗而奉_レ之。親好弥至。蘇摩後為_レ什說_ニ阿耨達經_一。什聞_ニ陰諸入界皆空無相_一。怪而問曰。此經更有_ニ何義_ニ而皆破_ニ壞諸法_一。答曰。眼等諸法非_ニ真實有_一。什既執_レ有_ニ眼根_一。彼據因成_ニ無實_一。於_レ是研_ニ覈大小_ニ往往移_レ時。什方知_ニ理有_レ所_レ歸。遂專務_ニ三方等_一。乃難曰。吾昔學_ニ小乘_ニ如_レ人不_レ識_レ金以_ニ鑰石_一為_レ妙。因_レ広求_ニ義要_ニ受_ニ誦中百二論及十二門等_一。(15)」

とのべているが、もとよりここに言う「阿耨達經」が何を指すか明らかではないが、「陰界諸入皆空無相なることを聞く」とあるから、般若系の經典であったことは間違いないであろう。つまり羅什が大乗の思想と接するのは般若系の經典を通してであったことが知られるのである。以上の記述は「高僧伝」によるものであるが、これは羅什二十才の受戒以前のこととして出てくる。二十才前に實際羅什が三論を理解して受誦したかどうか疑問がないでもない。こ

の部分は「出三蔵記集」には、龜茲国にかえてから、仏陀耶舎について十誦律を学び、又須利耶蘇摩に従って大乘を学び、中百二論を誦した⁽¹⁶⁾、とあるから、年代的には「高僧伝」の記述より「出三蔵記集」が後ということになる。いずれにしても、きわめて早い時期に竜樹系仏教に親しんでいたことは明らかである⁽¹⁷⁾。

また、般若経については「高僧伝」は

「於_レ是留_ニ住龜茲_一止_ニ于新寺_一。後於_ニ寺側故宮中_一。初得_ニ放光経_一。始就披読。魔来蔽_レ文唯見_ニ空牒_一。什知_ニ魔所為_一。誓心踰固。魔去字顯。仍習誦_ニ之_一。復聞_ニ空中声_一曰。汝是智人何用_レ読_レ此。什曰。汝是小魔宜_ニ時速去_一。我心如_レ地不可_レ転也。⁽¹⁸⁾」

とあり、この部分は「出三蔵記集」の記載も同じであるから⁽¹⁹⁾、従って、これらの記載によるかぎり、羅什は最初に放光般若経に眼を通したことになる。ここに言う「放光経」が、無叉羅訳(二九一年)の「放光般若波羅蜜経」を指すものかどうか審らかではないが、「放光経」はいわゆる大品般若と同系のものであるから⁽²⁰⁾、後に羅什が大品般若経を訳すのに何らかの影響を与えたであろうことは予想しうるところである。般若経も早い時期に羅什の眼にとまっていたことが、この記述によって明らかなのである。

このように「高僧伝」「出三蔵記集」などの記述によると、般若竜樹系の経論は、羅什の西域時代にすでにふれていたことになり、このことが、後に長安における般若竜樹系の経論の翻訳に大きな影響を与えたといえることができるのである。

さて、般若竜樹系の経論は「出三蔵記集」⁽²¹⁾「歴代三宝記」⁽²²⁾「大唐内典録」⁽²³⁾「古今訳経図記」⁽²⁴⁾「開元积経

録⁽²⁵⁾」「貞元新定目錄⁽²⁶⁾」によって調査すると、次のような経論をあげることができる。

- (一) 摩訶般若波羅蜜經二十七卷 (三十卷、四十卷)
- (二) 小品般若波羅蜜經十卷
- (三) 金剛般若波羅蜜經一卷
- (四) 仁王護国般若波羅蜜經一卷
- (五) 摩訶般若波羅蜜大明呪經一卷
- (六) 維摩詰所説經二卷
- (七) 大智度論百卷
- (八) 中論四卷
- (九) 十二門論一卷
- (十) 百論二卷
- (十一) 十住毘婆沙論十四卷

の十一部であるが、これらは先にあげた諸経録すべてに載っているわけではない。(四)仁王護国般若波羅蜜經は「出三蔵記集」に掲載されておらず、(五)摩訶般若波羅蜜大明呪經は「開元録」「貞元録」にのみ掲載されるものである。従って、この二経の信憑性ははなはだ怪しいと言わねばならないが、小野玄妙博士は、(四)については「羅什の訳ではない」としており、むしろ偽経であるとのべておられる⁽²⁷⁾。羅什訳とするには問題の多い経典ということで一応除外

する。また、(五)については「抄経の類であって別に論ずる必要はない」とされるが、これはいわゆる「般若心経」のことであり、この經典自体が、広い地域に流布していたことが知られているから(28)、羅什訳ではないとする理由もないであろう(29)。

従って、(四)仁王護国般若波羅蜜経のみを除外して、般若竜樹系経論は十部ということになる。従って、(六)維摩詰所説経、(十)百論をのぞいては、般若系經典と竜樹造の論書というように明らかに大別されている。

次に以上の十部の経論のうちで、翻訳年時の明らかかなものを年代順に列挙すると次のようになる。

- (七) 大智度論 弘始四年夏出。七年十二月二十七日訖。
- (一) 摩訶般若波羅蜜経 弘始五年四月二十三日出。六年四月二十三日訖。
- (十) 百論 弘始六年出。
- (六) 維摩詰所説経 弘始八年出。
- (二) 小品般若経 弘始十年二月六日出。四月三十日訖。
- (八) 中論 弘始十一年出。
- (九) 十二門論 弘始十一年出。

即ち、訳出年時不明なもの(三)金剛般若波羅蜜経、(五)摩訶般若波羅蜜大明呪経、(十)十住毘波沙論の三本にすぎない。しかし、(三)について、宇井伯寿博士は、嘉祥大師の金剛般若疏(30)と宗密の金剛経論疏纂要(31)にある弘始四年の説をとっておられる(32)。また、梶芳光運博士によれば「大周録」には弘始三年とあり、また、天台大師は金剛般若経

疏の中でこの説をとっているが、この年の末十二月二十日に羅什は長安に来たのであるから、きわめて不自然である、とされ、一応弘始四年以後との結論を下された(33)。恐らくこの年時は、弘始四年頃という含みをもたせたものであろう。このようにみてくると、(五)(六)の二経論の翻訳年時が不明ということになる(34)。

さて次に、般若系經典の訳出がどのようなようであったか、ということについて、訳場に列した僧叡は次のように述べている。

「究摩羅什法師、惠心風悟超拔特詣。天魔于而不_レ能廻。淵識難而不_レ能屈。扇_二龍樹之遺風_一。振_二惠響於此世_一。秦王感_二其來儀_一。時運開_二其凝滯_一。以_二弘始三年歲次星紀冬十二月二十日_一至_二長安_一。秦王扣_二其虛闕_一。匠伯陶_二其淵致_一。虚闕既闡乃正_二此文言_一。淵致既宣而出_二此积論_一。渭浜流_二祇洹之化_一。西明啓_二如来之心_一。逍遙集_二德義之僧_一。京城溢_二道詠之音_一。末法中興將_レ始_二於此乎_一。予既知命遇_二此真化_一。敢竭_二微誠_一属_二当訳任_一。執着之際。三惟_二亡師五失及_三不易之誨_一。則憂懼交懷。惕焉若_レ厲。雖_二復履薄臨深_一未_レ足_レ喻也。幸冀_二宗匠通鑿_一。文雖_二左右_一而旨不_レ違_レ中。遂謹受_二案訳_一敢_二当_二此任_一。以下弘始五年歲在_二癸卯_一四月二十三日。於_二京城之北逍遙園中_一出_二此経_一。法師手執_二胡本_一口宣_二秦言_一。両_レ积異言交_レ弁_二文旨_一。秦王躬攬_二旧経_一驗_二其得失_一。諮_二其通途_一担_二其宗致_一。与_二諸宿旧義業沙門积惠恭・僧碧・僧遷・宝度・惠精・法欽・道流・僧叡・道恢・道標・道恒・道惊等五百余人_一。詳_二其義旨_一審_二其文中_一。然後書_レ之。以_二其年十二月十五日_一出_レ尽。校正檢括。明年四月二十三日乃_レ訖。文雖_二粗定_一以_二积論_一檢_レ之猶多不_レ尽。是以随_レ出_二其論_一随_レ而正_レ之。积論既訖爾乃文定。(35)」(大品経序)

この記述によると秦王をはじめとして如何にその訳業に重点をおいたかが推察できる。ここにいう「亡師五失及三

不易」というのは道安による「摩訶鉢羅若波羅蜜經抄」の文を指している

「訳胡為秦。有五失本也。一者胡語尽倒而使從秦。一失本也。二者胡經尚質。秦人好文。伝可衆心非文不_レ合。斯二失本也。三者胡經委悉至_レ於歎詠。丁寧反覆。或三或四。不_レ嫌其煩。而今裁斥。三失本也。四者胡有義記正似_レ乱_レ辞。尋_レ説向_レ語文無_レ以_レ異。或千五百刈而不_レ存。四失本也。五者事已全成。將更傍及。反騰前辞已後説而悉除。此五失本也。然般般經。三達之心覆_レ面所_レ演。聖必因_レ時時俗有_レ易。而刪_レ雅古以_レ適_レ今時。一不易也。愚智天隔聖人巨_レ階。及欲_レ以_レ千歲之上微言。伝使_レ合_レ百王之下末俗。二不易也。阿難出_レ經去_レ仏未_レ久。尊大迦葉令_レ五百六通_レ迭察迭書。今離_レ千年而以_レ近意_レ量截。彼阿羅漢乃兢兢若_レ此。此生死人而平平若_レ此。豈將不_レ知_レ法者勇乎。斯三不易也。涉_レ茲五失_レ經三不易。訳胡為秦。詎可_レ不_レ慎乎。正当以_レ不開異言。伝令_レ知_レ会通_レ耳。何復嫌_レ大匠之得失乎。是乃未_レ所_レ敢_レ知也。(36)」

以上のような亡師道安の五失三不易の誨に注意しながら、さらにまた、釈論つまり大智度論の文と比較しながら訳語の吟味をはかり、訳業に従事したのである。

「大智論記」には

「究摩羅耆婆法師。以下秦弘始三年歲在_レ辛丑十二月二十日。至_レ長安。四年夏於_レ逍遙園中西門閣上。為_レ姚天王_レ出_レ釈論。七年十二月二十七日乃訖。其中兼出_レ經本禪經戒律百論禪法要解。尚五十万言。并此釈論一百五十万言。論初品三十四卷。解釋_レ一品。是全論其本二品已下法師略_レ之取_レ其要。足_レ以_レ開_レ釈文意而已。不_レ復備_レ其_レ広釈。得_レ此百卷。若_レ尽_レ出_レ之。將_レ十_レ倍於此。(37)」

とあり、たしかに大品般若経よりも一年先、つまり弘始四年（四〇二）の訳出である。しかし、完訳するまでに三年かかったことになっており、その間に他の経論、律などを翻訳したことになっている。しかも、大品般若経の翻訳は弘始六年約一年間で完成したことになっているから、大智度論の翻訳が一年早く始まり、一年遅く完成したことになる。しかし、これらの記述では、弘始五年つまり大品般若経の翻訳開始の時期に大智度論の翻訳がどの程度進んでいたかは審らかではないが、「以_三釈論_二檢_レ之」という記述は、両経論の翻訳が平行して行われる弘始五年〜六年のことと解すれば理解できないことはない。

さらに、羅什は西域時代に「放光経」と接しているから（37）、般若系經典の訳出には苦勞のないことは予想できる。だからこそ「亡師の五失三不易」の検討とか釈論の参照とか、訳文の流麗さを求めて、余裕をもって訳業に従事することができたのであろう。

次に、小品般若経の訳出であるが、「小品経序」には

「有_三秦太子_一者。寓_三跡儲宮_二擬_三韻区_一外_一。翫_三味斯経_二夢想增至准_三悟_一大品_一。深知_三訳者之失_一。会聞_下究摩羅法師。神_三授其文_二真本猶存_上。以_三弘始十年二月六日_一。請令_レ出_レ之。至_三四月三十日_一。校正都訖。考_レ之旧訳。真若_三荒田之稼芸其半_一。未_レ詎多也。斯経正文凡有_三四種_一。是仏異時適化広略之説也。其多者云_レ有_三十万偈_一。少者六百偈、此之大品。乃是天竺之中品也。随宣之言。復何必計_三其多少_二議_三其煩簡_一耶。胡文雅質按_レ本訳_レ之。於_三麗巧_二不_レ足樸正有_レ余矣。幸冀文悟之賢。略_三其華_二而幾_三其实_一也。」（39）

この經典は、序によればわずか三ヶ月で完成したことになるが、羅什は以前に大品般若経、大智度論の訳出を完了

しているから、羅什にとつても比較的容易であつたことが想像できる。しかもこの翻訳は、旧経の欠点を補うために
行つたものであるとしている。

「道行坦_ニ其津_一。誰問窮_ニ其源_一。随喜忘趣以要_レ終。照明不化以即_レ玄。章雖_ニ三十一_一。貫_レ之者道。言雖_ニ十萬_一。佩_レ
之者行。行凝然後無生。道足然後補_レ処。及_レ比而變_ニ一切智_一也。(40)」

ここにいう道行とは道行般若経を指すものであろう。道行経には道安の序があるから、これによれば

「若卒_レ初以要_ニ其終_一。或忘_レ文以全_ニ其質_一者。則大智玄通居可_レ知也。從_ニ始發意_一速_ニ一切智_一。曲成_レ決_レ著入地無_レ
深。謂_ニ之智_一也。故日遠離也。三脱照_レ空四非明_レ有。統_ニ鑑諸法_一因後成_レ用。藥病雙亡。謂之觀也。明此_ニ二行_一。於_ニ
三十萬言_一。其如_レ視_ニ諸掌_一乎。顛沛造次無_レ起無_レ此也。(41)」

ここにいう「三十萬言」をうけて、序に「三十章」「十萬言」と言つたものであろうが、旧訳の欠点を補うことが
その主な目的であつたということができよう。

さらに羅什以前から大品般若経、小品般若経などの比較研究が行われていたことは「出_ニ藏記集_一」支道林による
「大小品対比要抄序」によつても明らかである。

而大品言數豐具辭領富益。問對_ニ衍奧_一而理統_ニ宏邃_一。雖_ニ玄宗易_レ究而詳事難_レ備。是以明夫為學之從。須尋_ニ迹旨_一
闕_ニ其所往_一。究_ニ攬宗致_一標_ニ定興_一。為後悟_ニ其所滯_一統_ニ其玄領_一。或須練_ニ綜群問_一明_ニ其酬對_一。探_レ幽研_レ蹟_ニ其
沙致_一。或以_ニ教衆數溢諷績難_レ究。欲_ニ為寫崇供養_一力致無_レ階。諸如_レ此例群仰分狹。闕者絶_レ希。是故出_ニ小品_一者
參_ニ引王統_一。簡_ニ領群目_一。筌_ニ域事數_一。標_ニ判由宗_一。以為_ニ小品_一……惟昔聞_レ之日。夫大小品者出_ニ於本品_一。本品

之文有_二六十万言_一。今遊_二天竺_一未_レ適_二於晉_一。今此_二抄亦興_二于大本_一。出者不_レ同也。而小品出_レ之在_レ先。然斯_二經雖_二同出_二於本品_一。而時往有_二不同_一者。或小品之所_レ具。小品之所_レ備。小品之所_レ闕。所以_レ然者。或以_二二者之事_一同互相以為_レ頼明_二其本_一。故並矣。而小品至略_レ玄総_二事要_一。故使_二文流_一相背義致同乖。群儀偏歸_一。至_二於說者_一。或以_二專句推事_一而不_レ尋_二況旨_一。或多以_二意裁_一不_レ依_二經本_一。故使_二文流_一相背義致同乖。群儀偏供喪_二其玄旨_一。或失_二其引_一統錯徵_二其事_一巧_レ辭。弁_レ偽以為_二經體_一。雖_二文藻清逸_一而理統乖_レ宗。是以先哲出_レ經。以_レ胡為_レ本。小品雖_レ抄以_レ大為_レ宗。推_レ胡可_二以明_レ理。徵_レ大可_二以檢_レ小。(42)

このような般若系典の状況については、羅什も十分承知のはずであり、であるからこそ翻訳の嚴正を願ったのであろう。従って、ここに羅什的解釈の入る余地がないとも考えられるが、嚴正な翻訳とともに正しい意味を把握するために釈論をみたのであるから、この点は、般若系經典の異訳との比較などによって羅什訳の特徴をみるべきであろう。次に、維摩經についてふれるが、これは羅什による般若經系の經典とは多少その趣を異にしているが、先に断つたように空思想を背景としている經典という意味で、内容には特色があり、羅什以後の中国仏教に大きな影響を与えた經典であるので取りあげることにする。これには「註維摩經」をあらわした僧肇の序がある。

「以_二弘始八年歲次鶉火_一、命大將軍常山公左將軍安城侯_一。与_二義学沙門千二百人_一。於_二常安大寺_一請_二羅什法師_一重訳_二正本_一。什以_二高世之量_一。冥_二心真境_一。既_二尽_二環中_一又善_二方言_一。時手執_二胡文_一口自宣訳。道俗虔々一言_二三復_一。陶冶請求務存_二聖意_一。其文約而詣。其旨婉而彰。徵遠之言於_レ效顯然。余以_二闇短_一時予_二聽次_一。雖_二思乏_一參_レ玄。然躡得_二文意_一。輒順_レ所聞而為_二注解_一。略記成_レ言述而無_レ作。庶將束君異_レ世同聞焉。(43)」

訳経の様子がこの記述によって明らかであるが、「注維摩経」を著わした僧肇自身は、

「毎以_レ莊老_二為_レ心要_一。嘗読_レ老子道德章_二。乃歎曰。美則美矣。然期_三棲神冥累_二之方。猶未_レ尽_レ善也。後見_三旧維摩経_一。觀喜頂受。披尋翫味。乃言始知_レ所_レ歸矣。因_レ此出家。(44)」（高僧伝）

とあって、維摩経には大變興味を示し、しかも、この経が機縁となって出家をしたのである。この文に言う「旧維摩経」が具体的には誰の訳した經典を指すか不明であるが、羅什以前に存したと考えられるものは呉支謙訳「維摩詰経二卷(45)」であるから、あるいはこれを指すかも知れない。

しかし、支敏度による「合維摩詰経序」には

「在昔漢興始流_二茲土_一。干_レ時_レ有_二優婆塞支恭明_一(支謙)。逮及_二於晋_一有_二法護叔蘭_一。此三賢者並博綜稽古研_レ機_レ極_レ玄。殊方異音兼通開解。先後訳伝別為_二三経_一。(46)」

とあり、しかもこの三経を吟味して一本にまとめた、とあり、法護訳、叔蘭訳をみたかの如くに書いてあるので、正確なところは明らかではない。

また、訳経の年時も弘始八年とあるから、他の般若系經典の翻訳とも深い関連はないであろう。ただし、羅什訳によつて後に中国仏教に与えた影響ははるかに大きく、地論宗、天台宗、三論宗、禪宗、法相宗などにも影響を与えたことが知られている(47)。

最後に竜樹系経論の検討をしたい。先にふれたように、竜樹系の経論の中では、大智度論の訳出が一番早い。その後、弘始六年(四〇四)に提婆の百論が訳されたことになっている。僧肇の「百論序」によれば、

「有_二天竺沙門鳩摩羅什_一。器量淵弘俊神超邁。鑽仰累年、不可測。常味_二詠斯論_一。以為_二心要_一。先雖_二親訳_一。而方言未_レ融。致_レ令_二思尋者躊躇_二於謬文_一。擧_レ位者乖_レ迂於歸致_上。大秦司隸校尉安城侯姚嵩。風韻清舒、冲心簡勝。博涉_二内外_一、理思兼通。少好_二大道_一、長而弥篤。雖_二復形羈_二時務_一、而法言不_レ輟。每撫_二茲文_一、所_レ慨良多。以_二弘始六年歲次壽呈_一。集_二理味沙門_一、与_レ什老_二校正本_一。陶練覆疏、務存_二論旨_一。使_二質而不_レ野、簡而必_レ詣。宗致劃爾、無_二間然_一矣。(48)」
ここで注目すべきことは「先雖_二親訳_一、而方言未_レ融」という記述であつて、これによるかぎり、羅什は百論を弘始元年以前に訳していたことになる。しかも長安に來たのが弘始三年(四〇一)であるから、弘始元年迄の三年間かあるいはそれ以前に訳出したということである。また、

「論凡_二二十品_一。品各五十偈。後十品。其人以為_二無_二益此土_一。故闕而不_レ伝。冀明識君子詳而覽焉。(49)」
とあり、羅什訳は前半の十品のみであつて、後の十品は不必要であるからこれを省略したとある。しかしこの漢訳からは偈数が明確にできない。また、同じ著者の作として菩提流支訳の「百字論」があり、また、玄奘訳「広百論本」があつて、これら三つの論の關係を原典的に解明する必要があるであらう。それによつて羅什訳の特徴が明白になると思われる。

次に、中論、僧叡と曇影の二人による序があるけれども、僧叡の序によると

「中論有_二五百偈_一。竜樹菩薩之所造也。……所_レ出者是天竺_二梵志_一。名_二賓羅伽_一。秦言_二青目_一之所積也。其人雖_二信_二解深法_一、而辭不_二雅中_一。其中乖闕煩重者。法師皆裁而裨_レ之於_レ經通_レ之理、尽矣。文或左右未_レ尽、善也。百論治_レ外以閑_レ邪。斯之祛_レ内、以流_レ滯。大智釈論之淵博。十二門觀之情詣。尋_二斯四_一者。真若日月入_レ懷、無_レ不_二朗然鑒_一徹。

矣。(50)」

とあって、青目の註釈には理解困難な文があるので、これらを省き意味の通るようにして訳出したと言う。しかも、この序ではいわゆる、中論、百論、十二門論という三論の内容あるいは大智度論を加えて四論の内容を簡明に説明する文があつて興味深い。中論の訳出は弘始十一年(四〇九)であり、羅什の訳経の時期としては晩年になるが、これは先に「高僧伝」、「出三蔵記集」の羅什伝でふれた如く、西域時代に眼を通していたから、確かに翻訳としては十分に吟味し、また意味の十分理解しうるよう訳出したことは間違いないであろう。しかし、「中論有五百偈」という記述ははたしてどのような教え方によつてこう言つたか明らかではない。現存の刊本では五百偈を数えるものはないし、羅什訳も五百偈はない。いわゆる四百偈以上の端数を切りあげ五百偈としたのかも知れないが、明らかではない。また、十二門論については、やはり僧叡の序があり

「十二門論者、蓋是実相之折中。道場之要軌也。十二門者。総ニ衆枝ニ之大数也。門者。開通無滞之称也。論之者。欲下以窮ニ其源ニ尽ニ其理也。若一理之不レ尽則衆異紛然。有ニ惑趣之乖。一源之不レ窮則衆塗扶疎。有ニ殊致之迹ニ殊之不レ夷。乖趣之不レ泯。大士之憂也。是以竜樹菩薩。開ニ出者之由路。作ニ十二門以正之。(51)」

とあって、この序からは特別問題点はないようである。しかも序の最後に「以三秦弘始十一年ニ於ニ大寺ニ出之」とあり、中論と同じ年に翻訳されたことになる。この論もまた西域時代に羅什が眼を通したものであるから、内容はともかくとして中論とを一組として取り扱うことができるであろう。

むすび

以上、きわめて限定した資料によつてではあるが、羅什の翻訳による般若竜樹系経論について言及してきた。羅什門下によつて記述された序、後記などによると次のように言えるであろう。

羅什の翻訳の經典は、小品般若経と大智度論、さらに小品般若経の比較において検討せらるべきものである。そして又、それに金剛般若経もつけ加えることができる。

また、竜樹系経論では、百論は、菩提流支訳百字論、玄装訳広百論本の関係を考えて入れて検討すべきであり、中論と十二門論とは一組として検討することができる。維摩経はこれらの系統と作者内容において違うため、独自に取り扱うことが望ましい（異訳本との検討は必要である）。十住毘婆沙論については、その取り扱い方が最も困難であろう。

ところが、ひとたびこれらの経論に原典を加えると様相がかなり変わってくる。羅什訳による般若系經典は殆んど梵文原典との比較対照が可能であるし、竜樹系経論では、百論にはチベット訳の四百論を加え、中論は梵文、チベット訳を加え、維摩経は他の経論による梵文断片を加えることができる。従つて、これらの検討を経ることによつて、羅什の訳経の特徴がかなり把握しうる事が予想できるし、さらに原典のない大智度論、十二門論、十住毘婆沙論(52)についても、その特徴が明らかとなるであろうことが予想できるのである。

註1 塚本善隆「鳩摩羅什の活動年代について」(印仏研三の二、昭和三十、二二四頁)

2 金剛般若経、十住毘婆沙論などはその代表的なものであるが、これについては後にふれる。

- 3 戸田宏文「維摩経に顕われた鳩摩羅什三蔵の思想」(干潟博士古稀記念論文集、昭三九、四二一頁)、中村元「クマールジ
ーヴァ(羅什)の思想史的特徴——維摩経の漢訳のしかたを通じて——」(金倉博士古稀記念印度学仏教学論集、昭四一、
三六五頁)など。
- 4 大智度論、十住毘婆沙論、十二門論、百論等。
- 5 大品般若経 N. Dutt. *The Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*. Calcutta Oriental Series No. 28.
小品般若経 Rājendralāla Mitra. *Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā*. Calcutta. 1884.
金剛般若経 E., Conze. *Vajracchedikā-Prajñāpāramitā*. Series Orientale Roma XIII. 1957.
摩訶般若波羅蜜大明呪経 F. Max Müller and Bunyiu Nanjio. *The Ancient Palm-leaves containing the Prajñā-
pāramitā-hridaya-sūtra and the Ushnishavigaya-dhāraṇi*. Oxford 1884 *Anecdota Oxoniensia*. Aryan Series, vol. 1,
part. 3.
妙法蓮華経 ① H. Kern and Nanjio. *Saddharmapuṇḍarīka-sūtra Bibliotheca Buddhica* No. 10. St. Petersburg
1908—1912. ② Wogihara and Tsuchida Tokyo. 1934. ③ Nalinaksha Dutt, Calcutta. 1953. ④ 河口慧海, 池田澄
達編 貝葉梵文法華経, 大正14.
維摩詰所説経 *Sikṣāsāmuccaya* および *Candrakīrti, Mūlamadhyamahāvṛtti* による断片, 山田竜城, 梵語仏典の諸文
献 維摩経の項参照。
中論 *Candrakīrti, Mūlamadhyamahāvṛtti* の偈文
- 6 中村元「東洋人の思惟方法2——シナ人の思惟方法——」(春秋社) 五頁参照。
- 7 塚本善隆「仏教史上における肇論の意義」(塚本善隆編『肇論研究』一四一頁)
- 8 中村元、前掲書、なお、宮本正導博士は「羅什の潤色訳筆」といわれ、『大乘と小乗』六四〇頁、また、岩本裕博士も
「羅什一流のドグマの展開」といわれている(『極楽と地獄』一二六頁〜七頁)。
- 9 慧皎 高僧伝第二、鳩摩羅什伝、大正蔵 五十卷 三三三二頁上。

10 例えば、小野玄妙博士による「仏書解説大辞典」第十三卷総論。九三頁以下参照。ただし、この表はかなり検討の余地がある。また、経録を整理したものとしては、境野黄洋「支那仏教精史」三四一頁以下。常盤大定「後漢より宋齊に至る 訳経総録」八四六頁以下。

11 塚本善隆「仏教史上における肇論の意義」(塚本善隆編『肇論研究』一三五頁)。

12 大正蔵 五十卷 三三〇頁中。

13 同右 五十卷 三三二頁下。

14 同右 五十五卷 一〇一頁中。

15 同右 五十卷 三三〇頁下。

16 同右 五十五卷 一〇〇頁下。

17 また、「出三蔵記集」には「什雅仗大乘志存敷広。常歎曰。吾若著筆作大乘阿毘曇。非迦旃比也。」とあるところから、当時の仏教界において小乗は迦旃延の有部を指し、般若竜樹系の仏教を大乘阿毘曇と解していたらしい。なお、宮本正尊「大乘と小乗」六九〇頁参照。

18 大正蔵 五十卷 三三一頁上。

19 同右 五十五卷 一〇〇頁下。

20 梶芳光運「原始般若経の研究」一〇九頁。

21 大正蔵 五十五卷 一〇頁下以下。

22 同右 四十九卷 七七頁中以下。

23 同右 五十五卷 二五二頁以下。

24 同右 五十五卷 三五八頁下以下。

25 同右 五十五卷 五二二頁中以下。

- 26 同右 五十五卷 八〇九頁上以下。
- 27 「仏書解説大辞典」第十三卷総論。八七頁参照。ほかに、同辞典第七卷、三九七頁。椎尾弁匡博士はこの経を什以後の成立とみておられる(国訳一切経般若部六、四四八頁)。
- 28 宇井伯寿「大乘仏典の研究」三頁以下参照。
- 29 常盤大定、前掲書。二一五頁、梶芳光運、前掲書。一八七頁、一八九頁参照。
- 30 大正蔵 三十三卷 九〇頁下。
- 31 同右 三十三卷 一五五頁中。
- 32 宇井伯寿、前掲書、七頁参照。
- 33 梶芳光運、前掲書、一二九頁。
- 34 この二経については別の機会に論ずることにしたい。
- 35 大正蔵 五十五卷 五三頁上、中。
- 36 同右 五十五卷 五二頁中、下。
- 37 同右 五十五卷 七五頁中。
- 38 「於_レ龜茲帛純王新寺_レ放光般若_レ經」。始披読。魔来_レ敵_レ文。唯見_二空牒_一。什知_二魔所_レ為_一。誓_レ心逾固。魔去_レ字頭。仍習_二誦_一之。」(出三蔵記集 鳩摩羅什伝 大正蔵五十五卷、一〇〇頁下)。
- 39 大正蔵 五十五卷 五五頁上。
- 40 同右 五十五卷 五四頁下。
- 41 同右 五十五卷 四七頁中。
- 42 同右 五十五卷 五六頁上、中。
- 43 同右 五十五卷 五八頁中。
- 44 同右 五十卷 三六五頁上。

- 45 同右 五十五卷 九七頁下参照。
- 46 同右 五十五卷 五八頁中。
- 47 これらについては橋本芳契「維摩經の思想的研究」一一八頁以下参照。
- 48 大正蔵 五十五卷 七七頁中下。
- 49 同右 五十五卷 七七頁下。
- 50 同右 五十五卷 七六頁上。
- 51 同右 五十五卷 七七頁下。
- 52 これら三本はいずれも梵文原典、チベット訳がなく、また漢訳の異訳もない。従って従来より著者が問題とされてきた。
- 平川彰「十住毘婆論の著者について」(印仏研 五の二 一七六頁。)
- 干潟竜祥「大智度論の著者について」(印仏研 七の一 一頁。)
- 安井広済「十二門論は果たして竜樹の著作か——十二門論『観性門』の偈を中心として——」(安井広済『中観思想の研究』三 七四頁。)

なお、大智度論の作者については最近ロビンソンによっても言及された。(R. H. Robinson, *Early Mādhyamika in India and China*. 1967. p.34~39.)

これはいずれも竜樹—羅什という系譜をとっている。しかも原典がないから、問題視される要素は十分にあるが、羅什の訳経から問題の核心に迫るのも一つの方法であろう。